

表 1 調査におけるトラブルの種類および内容一覧

トラブルの種類	具体的なトラブル内容
社会的逸脱行動	奇声を発して警察に通報された 電車を止めてしまった 放火 無銭飲食 無銭乗車 盗み 万引き
家出、失踪	何ヶ月も連絡がない、自宅に帰宅していない
暴行	職場内での虐待 家庭内暴力 家庭内での虐待など 傷害事件
性的トラブル	売春の強要 職場内での性的暴行を受けた セクハラ 幼児へのいたづら 携帯電話での出会い系サイト 性的いたづらを受けた 痴漢行為
恐喝・金銭トラブル	多重債務（サラ金問題） 携帯電話料金超過（7ダルトサイトでの多額な請求）金銭の要求（された、した）
消費者トラブル	訪問販売、デパート商法、キャッチセールス（被害物は？ 英会話教材 会員 絵画 布団 宝石 その他）
不審者	不審者と間違えられた ほか
その他	

回答者は、各調査対象学校において上記の事態に対応してきた教員とし、過去3年間に於いて関わったトラブル事例について質問した。

調査用紙は2種類の記入方法によった。シート1は「各学校における該当トラブル全体」を記入するものでシート内に複数の事例について概要が記入できた。シート2は「個々のトラブル事例」を記入するもので、トラブル内容やトラブル当事者の特徴、解決方法、課題について問うた。回答事例の抽出は調査記入者の判断によった。

3. 調査実施手続き

全国の養護学校に対し郵送により調査用紙の配布・回収を行った。中学校特殊学級については各養護学校を通して調査協力を依頼した。

4. 調査用紙の回収

調査回収は養護学校573校中250校であった（回収率43%）。中学校特殊学級は協力校80校から回答があった（計330校）。回答学校は全国に分布していた。

IV. 結果

1. 社会的トラブルの実態と全体傾向

1) 回答学校の特徴

回答学校の種別は以下のものであった。全員通学の養護学校が 182 校と約半数であり、寄宿舍制あるいは施設併設の養護学校が 64 校、中学校心障特殊学級が 80 校であった。図 1 に示した。

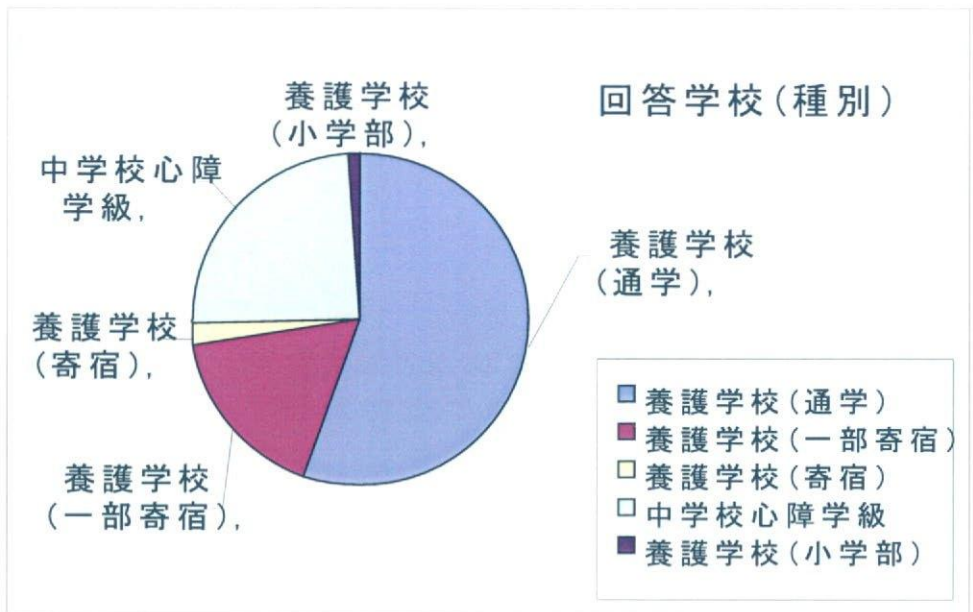


図 1 回答学校の種別

2) 回答事例の数の特徴

回答事例の全体結果を図 2 に示した。

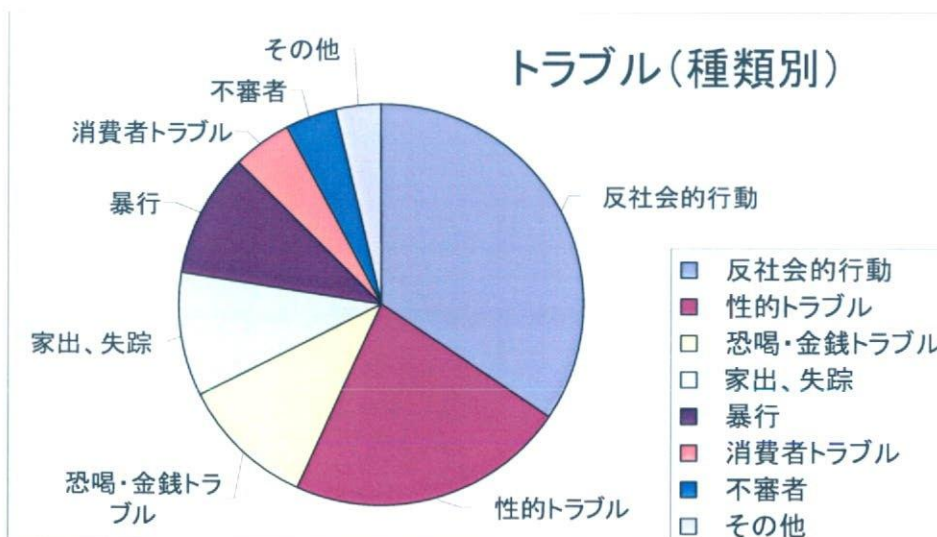


図 2 回答事例のトラブル種類別頻度

今回の調査では「教員や学校が対応したトラブル事例」のうち、教員が学校が支援に困難さを感じた事例について回答してもらった一番多かったものが「社会的逸脱行動」238件、ついで「性的トラブル」154件、「恐喝・金銭トラブル」75件、「家出・失踪」69件「暴行」68件「消費者トラブル」33件「不審者」30件であった。

得られた調査では、被害事例に加え加害を疑われた事例も報告されていたが、以下の結果では、トラブル背景を分析できた被害事例を中心に述べていくことにする。

2. 社会的トラブルの各論—被害事例の特徴と支援の実際

1) 性的トラブルに関する被害事例をめぐって

(1) 多くの子供達が性的トラブルに合っている

2005年5月の毎日子供新聞によると、「中学生以下の子供が性被害にあった強姦・強制わいせつ事件（未遂も含む）が警察に届け出があっただけで昨年度の1年間で2600件を越えている。これは1994年の1530件より7割も増えている」とある。

このように、現代の子供達は約20年前に比べ何らかの性的トラブルに巻き込まれる可能性が非常に高くなっている。知的障害児・者の性被害総数調査は行われていないが、社会状況と同様に増加していると考えられる。

また、想像されることではあるが、被害を受けるのは圧倒的に女子児童・生徒が多い。

(2) 被害事例の特徴について

今回の調査で性的トラブルの被害事例は、男女を合わせ62ケースであった。これらの事例を被害の特徴から、以下の5類にわけ分析を行った（図3, 4, 5）。

- ①身体を触られる。痴漢、変質者からの被害等
→24ケース（38.7%）
- ②身内や知人、地域、施設内、就労先等、身近な存在から被害等
→18ケース（16.1%）
- ③出会い系サイトに関連するケース、結婚詐欺等深刻な被害等
→10ケース（16.1%）
- ④家出や結婚詐欺、望まない妊娠等、深刻な被害等
→9ケース（14.5%）
- ⑤その他の被害（分類不可）
→1ケース（1.6%）

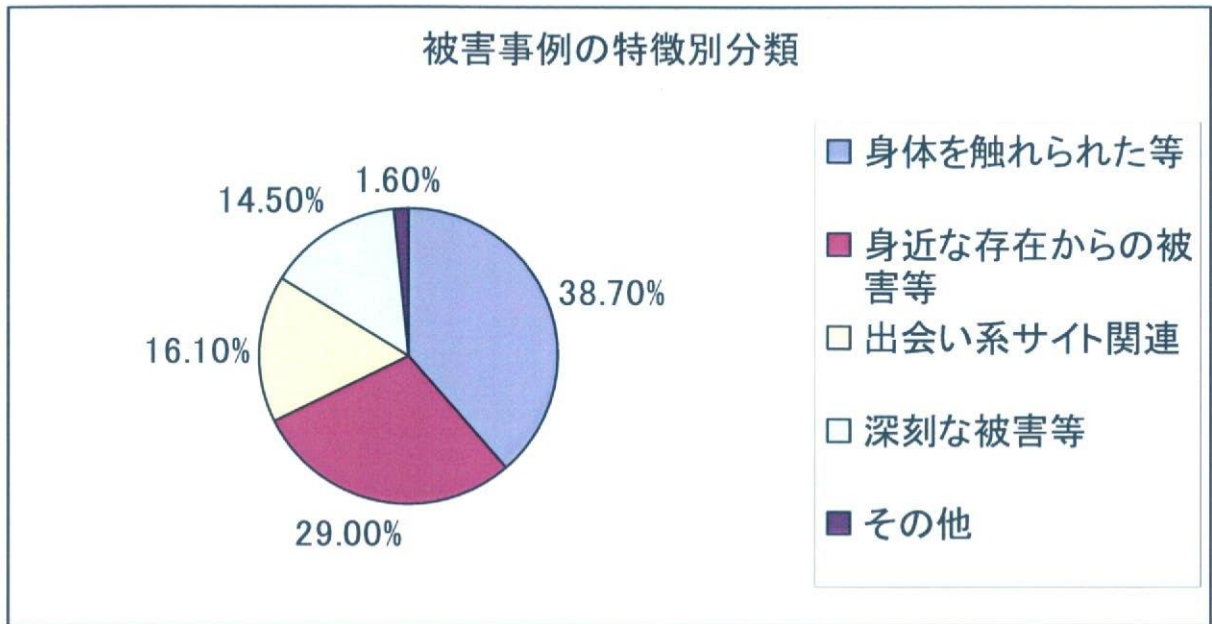


図 3 被害事例の特徴別分類

男女別で見ると、性的被害者は女子に多かった（図 4）

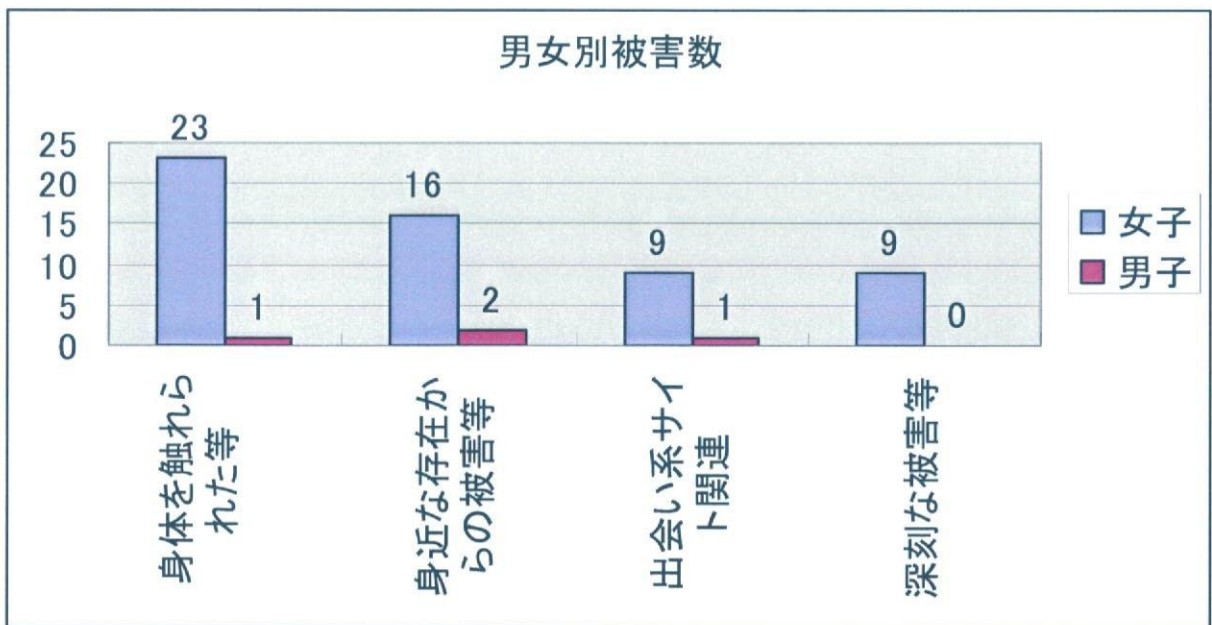


図 4 被害事例の特徴（男女別）

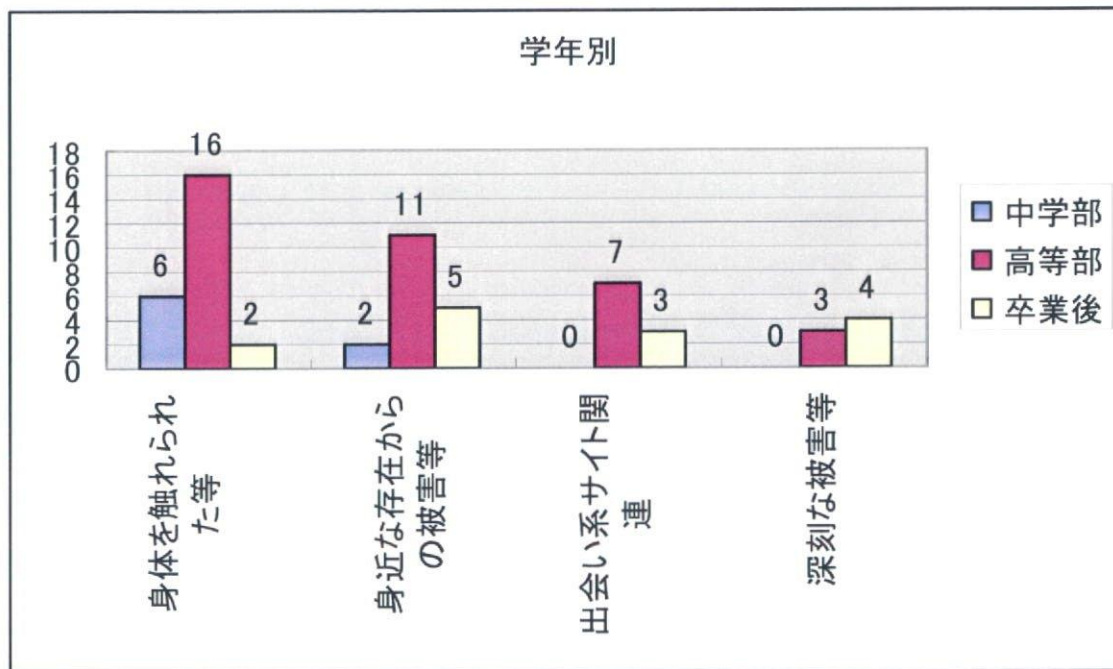


図 5 被害事例の特徴(学年別)

学年別に見ると、体を触られるなどの被害は高等部在学中でも多かったが、特に卒業後の被害事例に「深刻な被害」(後述)があがっていた。

(2) 特徴別被害ケースについて

性被害の事例について、被害特徴別に「トラブル回数」「親の協力度」および「解決したかどうか」「現代はどうしているか」など、事例の背景について検討した。

① 身体を触られた等のケース

この被害の主な事例は、以下のものであった。

事例；

下校途中に性的いたずらを受ける。
知らない男性から下腹部を見せられた。他

事例；

軽度の女子高校1年生が登校時に身体を触られ追いかけられた。
保護者は積極的に係機関相談に行った。
対応としては、警察に巡回をお願いした。また学校では登下校時における注意事項を定期的に指導したり、教師が巡回指導をしている。
・犯人は逮捕されていないため、解決の評価は不十分である。

この被害事例の背景要件について全体傾向を図6，7，8，9に示した。

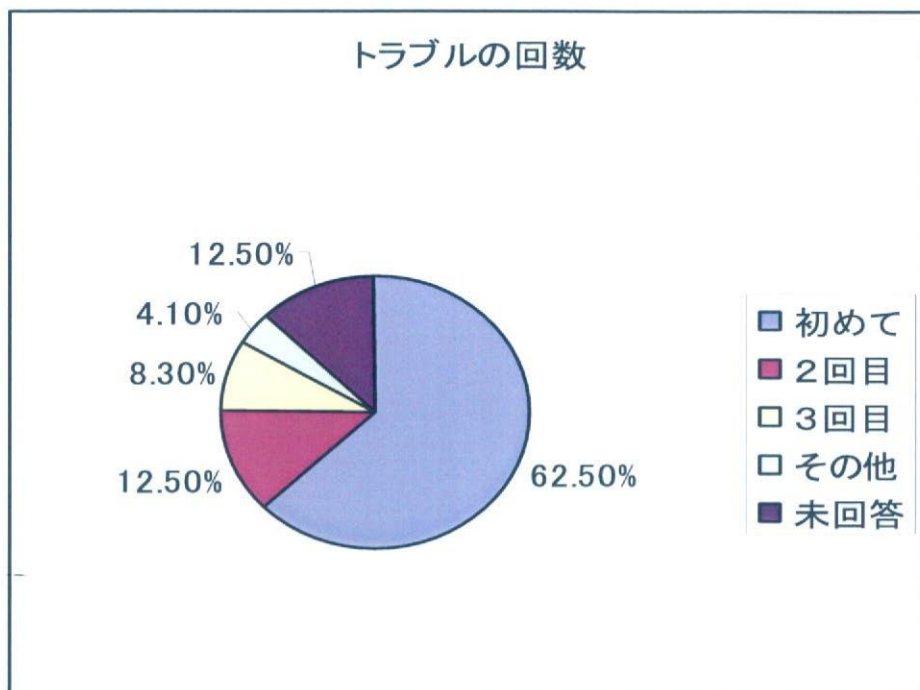


図6 トラブルの回数

被害を受けた生徒は、「このトラブルが初回でありその後は被害にあっていない」という事例が62.5%であり被害が繰り返されなかった例が多かったが、しかし、複数回被害にあってしまった例も見受けられ、ここでも深刻さが伺われた。

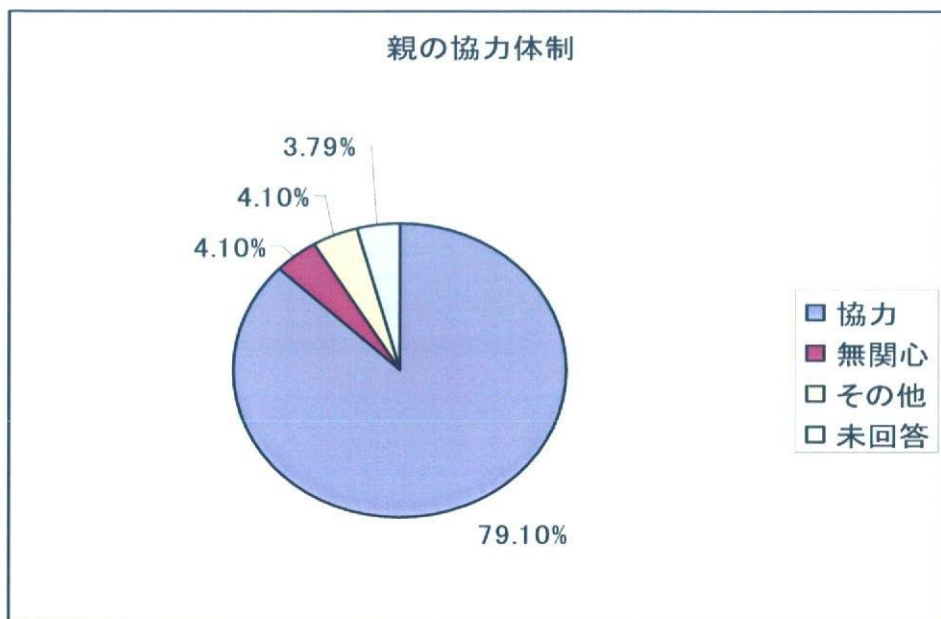


図7 親の協力態勢

被害の解決には保護者の協力が不可欠であるが、本調査では多くの親が学校と連携し早期の解決に向けて共同で動いていたことが明らかであった。

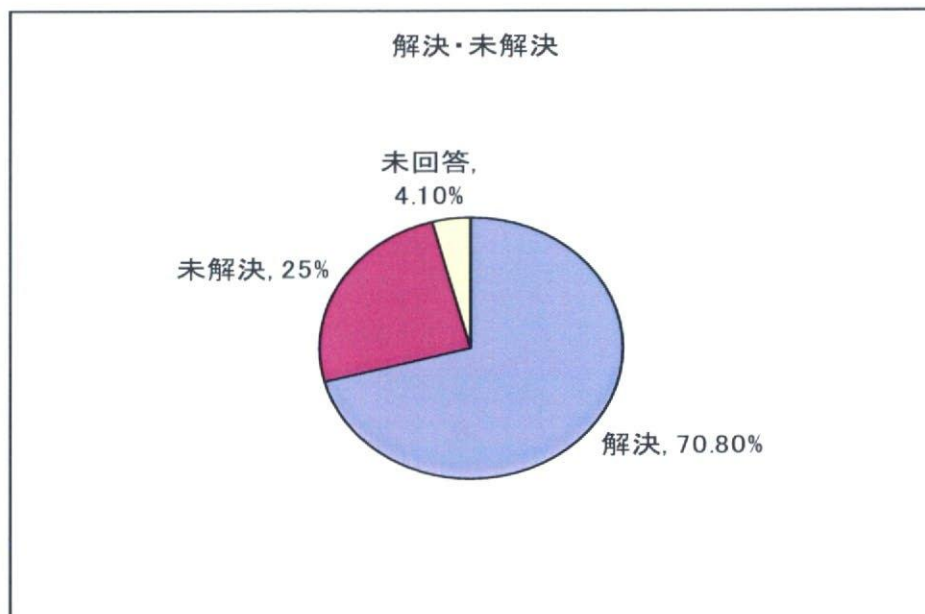


図8 被害事例の解決あるいは未解決状態

被害が解決されたかどうかについて図8に示した。多くは解決したとされていたが、未解決な事例も25%に達していた。また、解決したと言う事例の中にも、加害者は不明という事例もあった。街中での突発的な事態で起こり加害者が特定できないと言うケースも多く報告されていた。

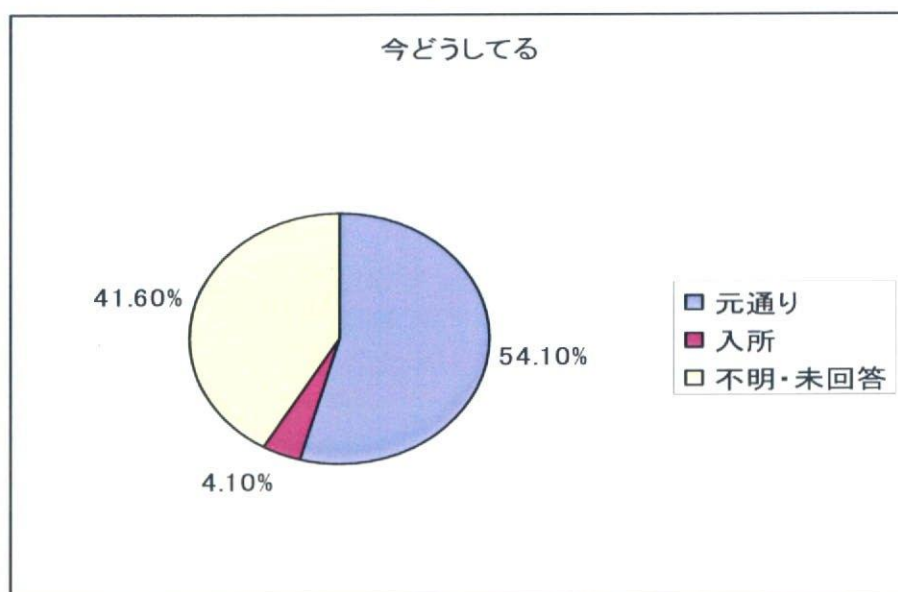


図9 被害事例の現在の状況

被害生徒が被害を受けたあとに、どのような生活になったかについても質問した。多くは元の生活に戻ったと回答されたが、4.1%で他の入所施設などの機関に移らざるを得なかった例も見られた。未回答数も多く、その後の生活の把握が不明な例もあった。

以上のように、「身体を触られる等の被害」に分類された被害事例は、痴漢的行為が多く、登下校中に被害に遭っているケースが多かった。被害を初めて受けるケースも多く、保護者が積極的に関係機関に相談をしている。また、保護者が自ら下校時に巡回をするなど登下校中の痴漢的行為に対しての自衛的対応策も見られた。

教師の「この事例に解決に満足しているかどうか」の自己評価については、不満足という回答も少なくなかった。これはやはり、被害生徒への対応は一応なされたものの、加害者が特定されず、社会的に解決されたとは言えないという点に対する課題を示すものであると考える。中には、犯人が把握されない場合でも「解決方法に満足」と評価した事例もあった。この事例は、被害事件後に、警察や学校側が登下校時の見回りなどを行うなどをしたなど、事後対応の方策を評価したものであった。しかし多くの教員は、生徒が登下校時に痴漢等のトラブルに遭うのではないかと心配している不安をもっていることも複数意見見られた。

このようなケース事例の解決法として学校でなにができるか、という質問に対しては、「性教育の充実」や「関係機関との積極的な連携」が上げられていた。ケース事例の中には、具体的に「警察のパトロールの実施」や「学校の登下校指導の実施」が行われている事例が少なくなかった。見回りなど地域住民の協力を得ながら安全な地域作りを求めている意見が出されていた。

また、保護者に対しても啓発活動の必要性が記入されていた。今後、学校として保護者や関係機関と積極的に連携した、地域ぐるみの対応を検討していくことが望まれていた。

② 身近な存在からの被害事例

この被害の主な事例は、以下のようであった。

事例；

- ・ 義理の父親からの性的いたずら。
- ・ 家族（知的障害）からの性的悪戯。
- ・ 知り合いや地域の人からの性的暴行。

この被害にわけられた事例の背景要件について全体傾向を図10、11、12、13に示した。

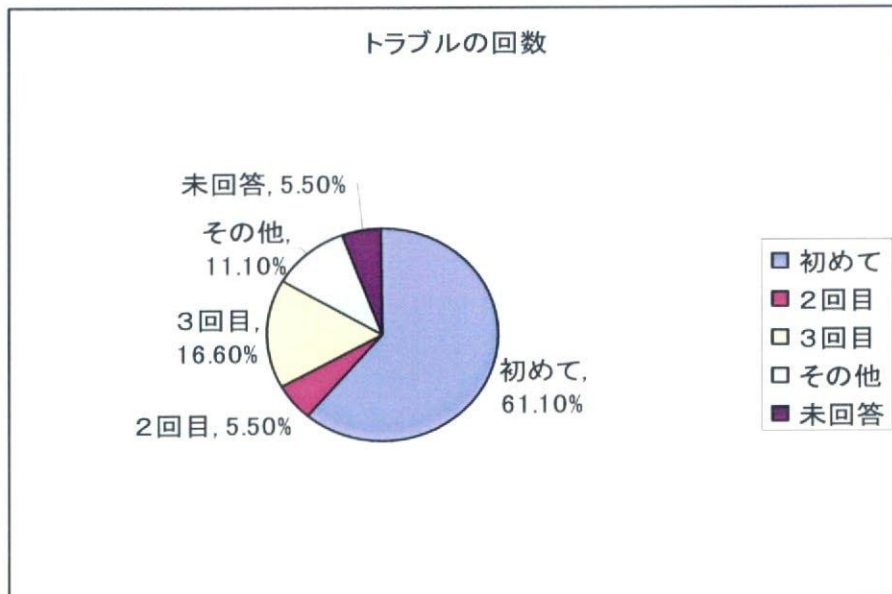


図10 被害トラブルの回数

被害を受けた生徒は、「トラブル初回」61.1%であり被害が繰り返されなかった例が多かった。しかし、3回目以上という複数回被害にあってしまった例も見受けられた。身近な人からの被害であり、学校が把握しているより被害の実態はより深刻であることが推測された。

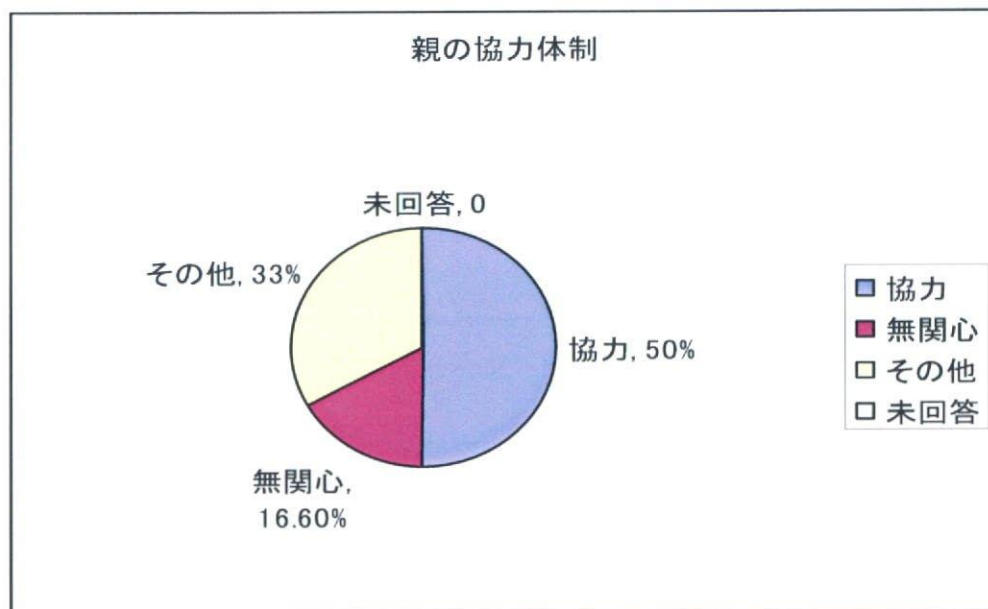


図11 親の協力態勢

この被害の場合、保護者が対応不可能のケースが多くあり解決のため

に学校との協力・連携を取ることが難しい問題があった。こうした場合の対応について、学校以外の関係機関と連動し対処するという回答が多かった。

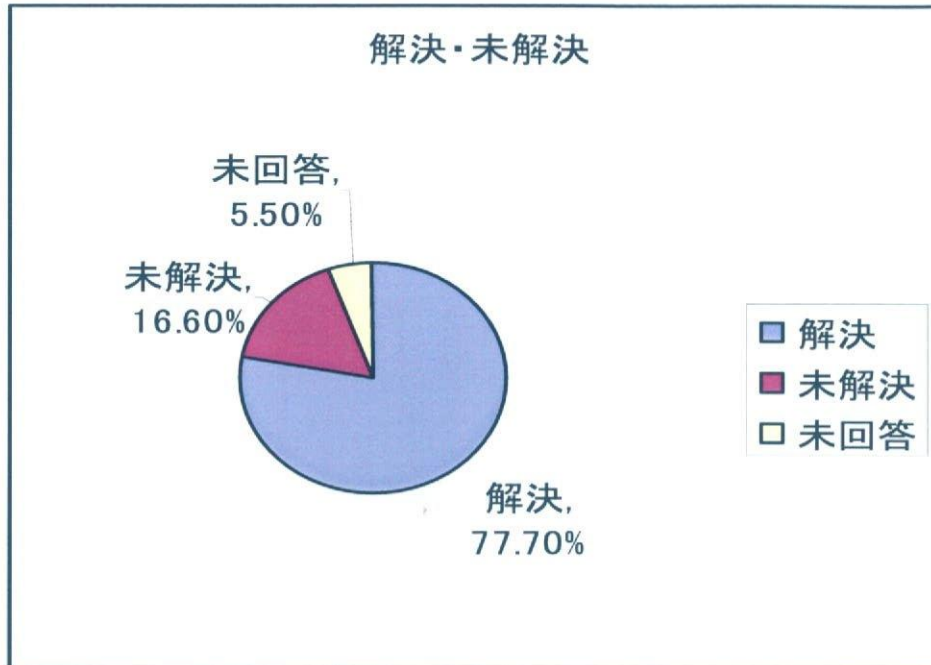


図12 被害事例の解決あるいは未解決状態

被害について学校が把握した場合は、多くの場合解決していたことがわかる。しかし、未解決の事例も少なくなかった。

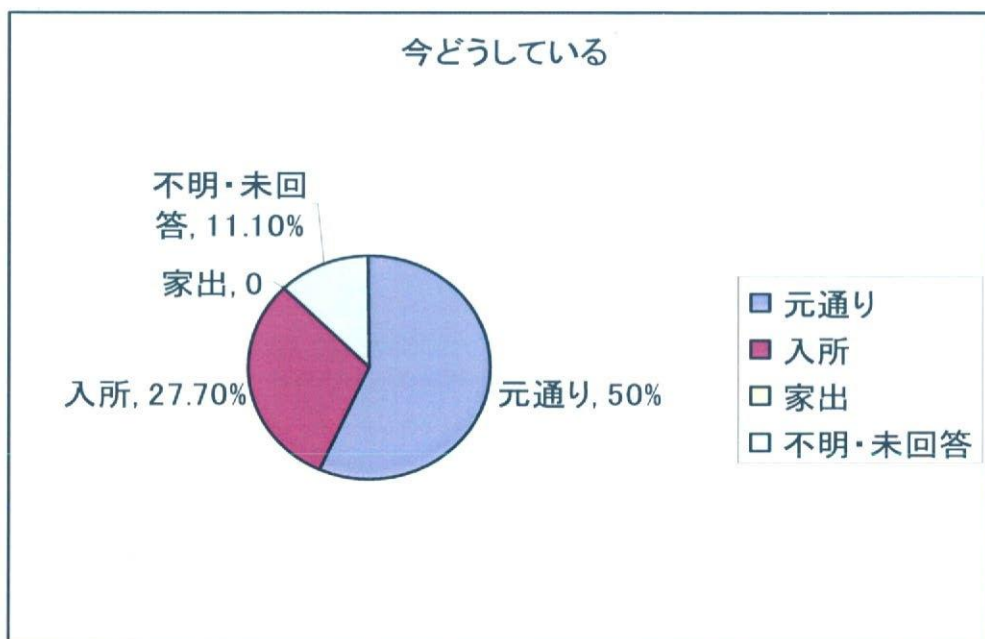


図13 被害事例の現在の状況

その後の被害生徒の生活状況については、「元の生活に戻った」例が多いが、身近な人が加害者であるために、解決後には入所施設に移行する例が多かった。約3割が入所や引っ越しなど生活の場の移動している。

以上のような結果から、身内からの被害で、繰り返し被害を受けているケースは、加害者が身内や近い存在のため、密室の場合が多いであろう。こうした被害事例では、生徒本人からは他者に被害を相談することは困難な状況がある。学校として可能な予防的あるいは解決的アプローチとしては、「日頃から個別指導相談の充実」をしていくことであるとす意見が上げられていた。

本調査での事例には、保護者や兄妹から性的な侵害行為があったというケースもあった。特に家庭内での被害の場合、質問項目「いまどうしている？」では被害生徒をこのような状況から離すために入所等の措置が取られることが多いのであろう。本来であれば、自宅や地域で生活が続けられることが望ましいので、可能な限り、精神的サポートや一定期間後に地域生活に戻れるようなシステムの存在を希望する。今後も、教育機関が学校以外の関係機関とも積極的に関わり、早期に解決する仕組み作りを検討していくことが必要だということであろう。

③ 出会い系サイトに関連した被害

この被害の主な事例は、以下のものであった。

事例；

- ・ 出会い系サイトで知り合った男性と性的関係を持った。
- ・ 出会い系サイトを利用したメールのやりとりの内容が問題。
- ・ 出会い系で知り合った男性と家出。

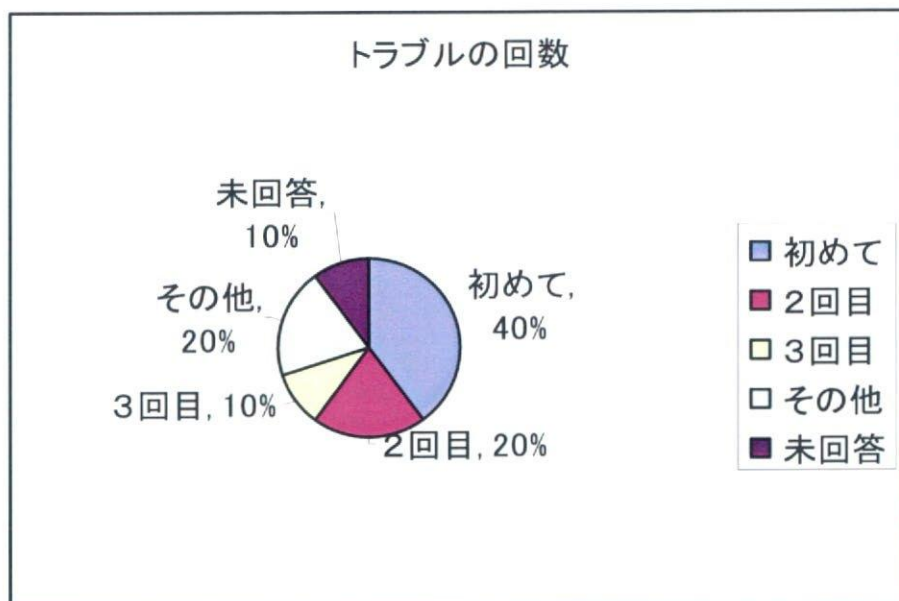


図14 被害トラブルの回数

事例にあげたような被害にわけられた事例の背景要件について全体傾向を図14, 15, 16, 17に示した。

被害を受けた生徒は、「トラブル初回」は40%であり、「被害経験が2回目、3回目」という事例が多く見られたのがこの被害類型の特徴であった。



図15 親の協力態勢

この被害の場合、保護者は協力的であるケースが多かった。一方、「無関心」との回答も少なくなかった。

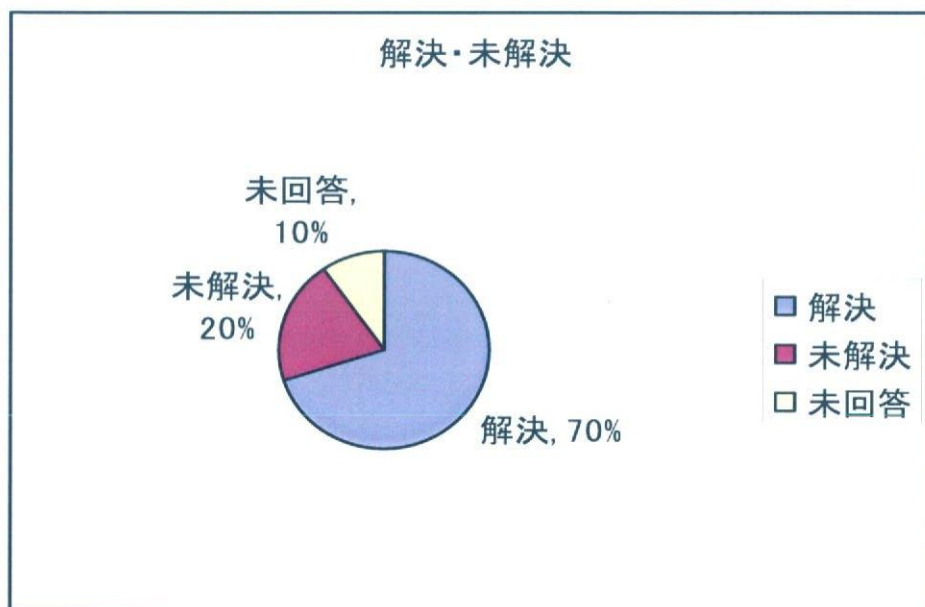


図16 被害事例の解決あるいは未解決状態

被害の解決を見ると、事例の70%が解決をしている。未解決事例も20%と少なくなかった。

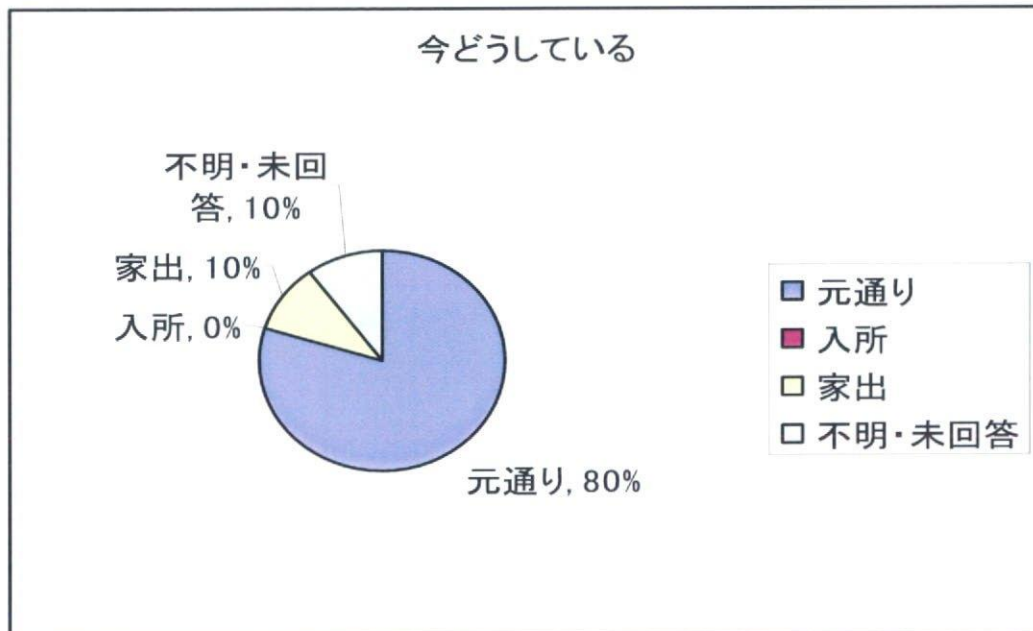


図17 被害事例の現在の状況

その後の被害生徒の生活状況については、「元に生活に戻った」ものがほとんどであったが、中には事例数は少ないが、出会い系サイトで知り合った男性との性交渉や家出等のトラブルに発展しているケースもあり、深刻な事態も報告されていた。

以上のような結果から、出会い系サイトを行ったきっかけとして、「男性と付き合いたい、周りに友だちがいなくて寂しいから」と複数の事例があることがわかった。「解決のためには何が必要か」という問いに、教員の多くが知的障害のある人たちの仲間づくりの必要性が述べられているのも、このような背景を指摘したものであろう。具体的な実践として、青年学級等のネットワークの充実が上げられていた。

現代では携帯電話は必要不可欠な道具となっており、知的障害のある生徒にとってもそれは同様であり、出会い系サイトや援助交際の問題など現代の社会問題も、彼らのトラブル課題として存在する。学校教育としては何を準備することが必要であろうか。生徒たちに携帯電話の使用方法や不必要なサイトへのアクセスをしないこと、そこで起こるリスクについて十分伝えること、リスクや被害に会わないために使用マニュアルを指導することなどが必要であろう。特に、携帯電話による不特定多数の異性とのアクセスが引き起こすトラブルなどを具体的に教えていくは重要である。また、未成年者にはアダルトサイト等へのアクセスができ

ないようなシステムも検討すべきではないか考えるが、課題でもある。

今後とも青年学級や働く障害のある人が集える場等の充実を図りながら日常的な人間関係を豊かにすることで、「友達が欲しいから等の理由で、出会い系サイトに安易に電話をする生徒たち」を少しでも減らしていくことをむ。

④ より深刻な被害等の事例について

調査によりあげられた事例の中で、より深刻であった事例をここで述べることにする。この被害の主な事例は、以下のものであった。

事例；

- ・望まない妊娠。
- ・相手の男性宅での長期にわたっての生活。
- ・知り合った男性に売春を強制される。
- ・結婚詐欺にあい、家の預金も渡してしまう。

この被害にわけられた事例の背景要件について全体傾向を図18、19、20、21に示した。

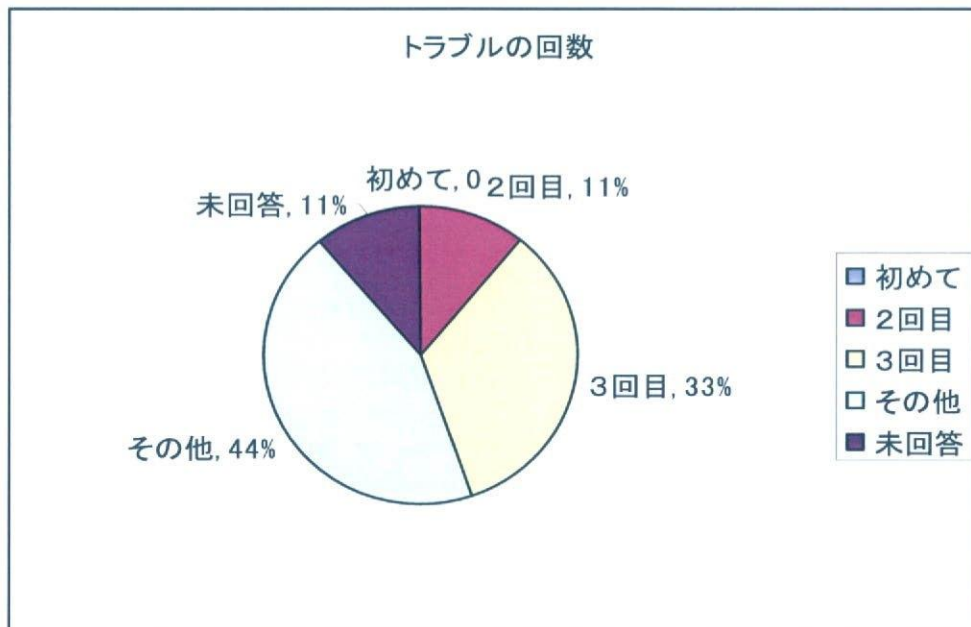


図18 被害トラブルの回数

被害を受けた生徒は、「トラブル初回」はなく、「被害経験が2回目、3回目」および「長期にわたり被害状態が継続している」とい回答がほとんどであった。長期にわたること事態が深刻さをもっていた。

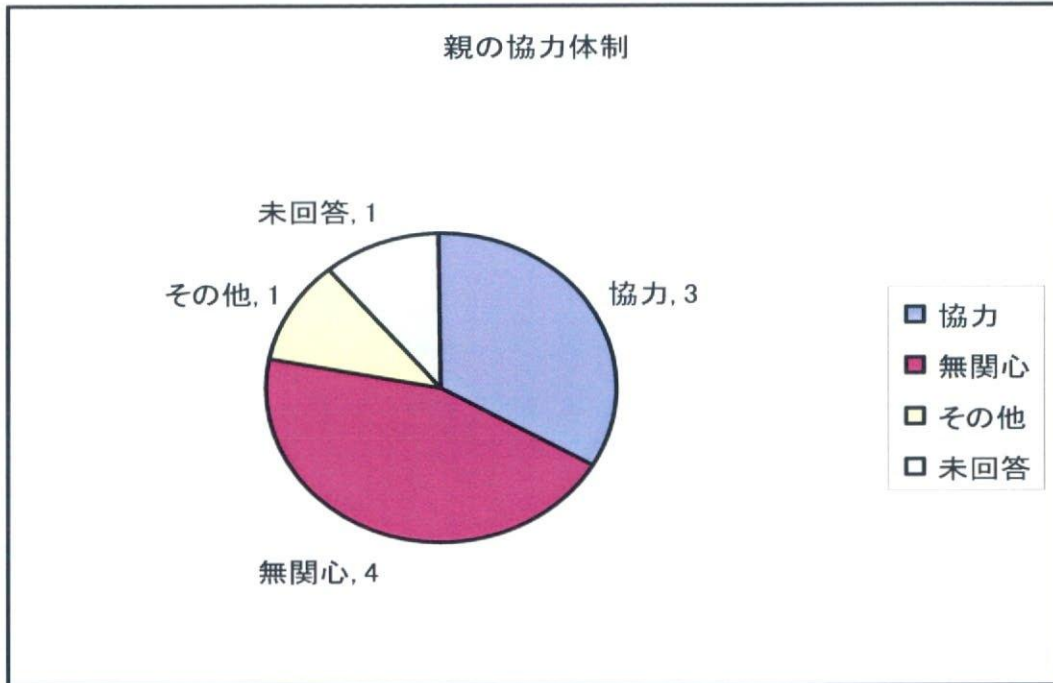


図19 親の協力態勢

この被害の場合、被害状況が深刻な事態もかかわらず、保護者の協力が取られていない場合が多くを占めた。さまざまな理由や背景があるが、なぜ保護者の協力が得られなかったのか、保護者の視点からも要件をさらに分析し検討する必要がある。

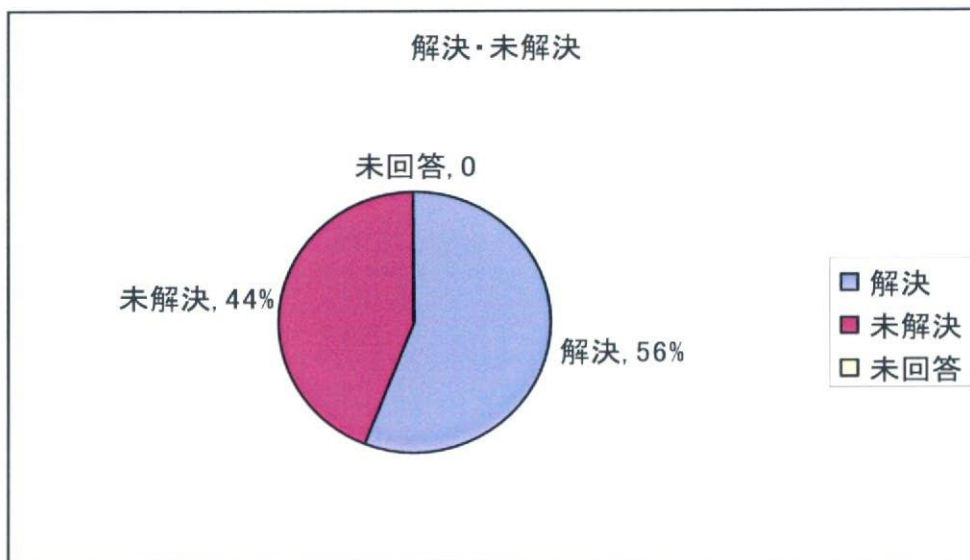


図20 被害事例の解決あるいは未解決状態

被害の解決を見ると、未解決事例が44%と他のトラブルに比べて未

解決率が高かった。継続状態が長期にわたっており解決の糸口を見いだせないでいる、という回答も少なくなかった。

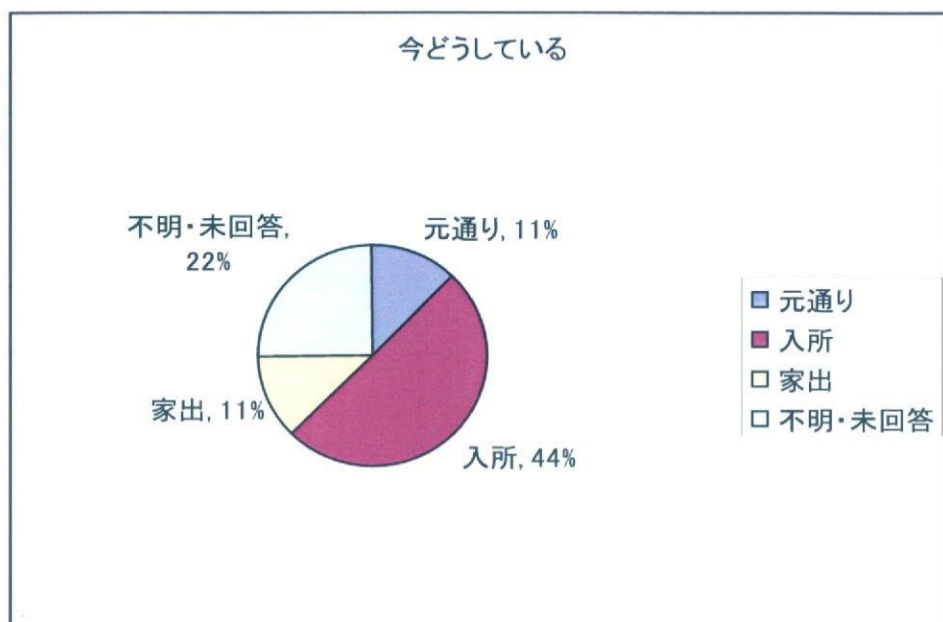


図21 被害事例の現在の状況

その後の被害生徒の生活状況については、「元に生活に戻った」事例は11%と少なく、入所施設への移行、あるいは家出等の深刻なケースがあがっていた。

以上のような結果から、深刻な被害ケースの中には生活全般に関わること多いことがわかった。保護者も教員も解決の糸口が見えず困っているが、なすすべがないという事例も少なくなかった。家出中の事例もあり、解決には関係機関との連携が不可欠であり、事例によっては警察機関との連携や介入により解決していたものもあった。生徒ら本人にとっても、早期に問題を発見し解決方法を探っていく必要があり、支援、保護、即対応できる体制づくりが求められるところである。今後、学校での性トラブルに対する対処方法や性教育の充実、関係機関との連携、学校内キーパーソンの養成なども検討していくことが課題となろう。

(4) 性的被害と知的障害について

性被害は、その実態が表面化することが少なく、知的障害のある人達の被害についても同様と考えている。性的被害が公になりづらい理由は、以下のような3つの沈黙のためだと言われている。

加害者は被害者に対して、トラブルを口止めしたり、暴力等で服従を強いる等が「加害者が強いる沈黙」である。被害者は自分が受けた性的な被害を、恥ずかしさや人に知られたくないと隠してしまう。また、何

が起きているのかわからなかったり、身内の人間の行為を告白できない等が「被害者が強いられる沈黙」である。

また、性的被害者に対する心ない批判や無理解、偏見等から「社会が強いる沈黙」もある。今回の調査の性的被害の対象は、学齢期と養護学校卒業後間もない生徒達である。精神的にも肉体的にもまだ未発達さがある学齢期の知的障害のある人にとって、身体的苦痛や精神的苦痛等、直接的な影響はもちろんのこと、生活の場の移動など2次的な被害にも目を向けていく必要がある。

また、深刻な性的被害は身近な人から受けるケースが多い。被害は見知らぬ人から受けるのではというイメージがあるが、実際には室内や昼間でも起きている。日頃から生徒の小さな変化やつぶやきを見逃さないようにしていくことが大事である。

今回の性的被害の62ケースは、実際に被害を受けた数から見れば、氷山の一角ではないかと考える。それは前述の3つの沈黙に関わる点や知的障害者・児の特性についても関わりがある(野沢、2004)。

障害者は受けたとしても、その記憶や感情をきちんと整理してうまく第三者に伝えられない場合がある。

- ①被害が起こったときに正確に表すことが困難な場合。
- ②被害に遭っている現状が理解できない場合。
- ③加害者が親だったり身内に近い存在であれば、日頃障害者を援護する立場の人に何も言えない、と言う場合。
- ④被害を訴えても警察や関係機関が知的障害のある人の証言を証拠として受け入れない、また、対応の仕方がわからない場合。

(5) 学校関係者ができること—未然予防の為に

調査により得られた事例には未解決事件も多いが、それであったも、保護者や学校関係者等は解決に向けて積極的に事件に関与していたことがわかった。地域社会の安全のキーパーソンや関係機関との連携を求め、解決に導いたり探り出そうとしている姿が浮かんできた。

特に、学校内の動きとしては、一人一人の実態にあった生徒指導と性教育等による学習を積み上げていき、学校が関係機関との窓口になり、犯罪を未然に防ぐネットワークを構築していく必要性が読み取れた。そのためには一つに警察等の専門機関との連携をあげられると思われた。安全の社会資源・機関と連携を基礎に地域や生徒を取り巻く生活環境を、犯罪が発生しにくい「見守りの地域」にしていくことが望ましい。

また、犯罪が起こってしまった時のためにも、知的障害を理解してもらうための方策が必要である。日頃から、登下校児に利用する駅やバスの運転手さんや近所のコンビニの店員さんなどに、何かあればすぐに学校

に連絡をいただけるようお願いしておくべきだろう。その際、学校の連絡先はもちろん、簡単な知的障害者の理解パンフやコミュニケーションボードなどを活用すれば良いと思う。

深刻なケースに対しては、警察等の関係機関との連携が行われている。学校側や対応する教員は、すぐ対応が必要なケースや警察の関与が必要な場合の最低限の知識を持ち合わせておくべきである。そのためにも、学校が率先して研修会や講習会を開催するべきであろう。

その他、学校教育に望まれている点は、調査の中でも多くの意見があったように「性に関する教育機会の充実」が多く上げられている。

現在各養護学校等で実施されている性に関する教育機会は多種多様である。その中で性被害、加害の学習の重要な視点として「被害者からの立場を学ぶ」をあげる。被害を徹底して学ぶことができれば、そこから加害へと向かうことも少なくなると考えられる。少なくとも、自分の身に置き換えることができれば、安易に加害に走らなくなるのではないかと考える。もちろん、トラブルに巻き込まれそうになる時や被害を受けそうな時に、きちんと対処できる方法を学ばせることも大切である。それらのトラブルに対して「イヤ！」とはっきりと言えるような指導を行っていきたい。自分を大切にすること、そのことは他人を大切にすることにつながると言う観点を基本として指導・支援を行いたいと考える。

(7) まとめにかえて

近年、地域で安心して暮らしていけるためのネットワークづくりが進んできている。各地で関係機関を巻き込んだ各地での安全ネットが活発に展開されている。パンフの作成、配布や地域での活動を進めている中、次は学校ができることを真摯に考え実施していくべきであると思われた。学校において、生徒たちに提供できる「被害予防、加害予防教育の機会」を検討し充実を図ることが大切であろう。

また、障害のある人を支援する一機関として地域での役割を担っていく意識を持つことが必要である。また、教員は在学中の生徒や卒業生のキーパーソンになっていることも多い。何からの兆候や変化が合った時に、身近にいるキーパーソンが相談に乗り、支援することができる状況やシステムがあれば、トラブル自体の総数を減らすことも可能である、と考える。

いずれにしても学校は、関係機関との積極的な連携を進めていく姿勢を持ちたい。具体的な授業では生徒にわかりやすいロールプレイ等の実施に関係機関や地域住民と連携して行っていく等、今できることを着実に積み重ねていきたい。今後全国から寄せられた事例を元にした意見、教訓を、現場に活かしていく実践が必要である。

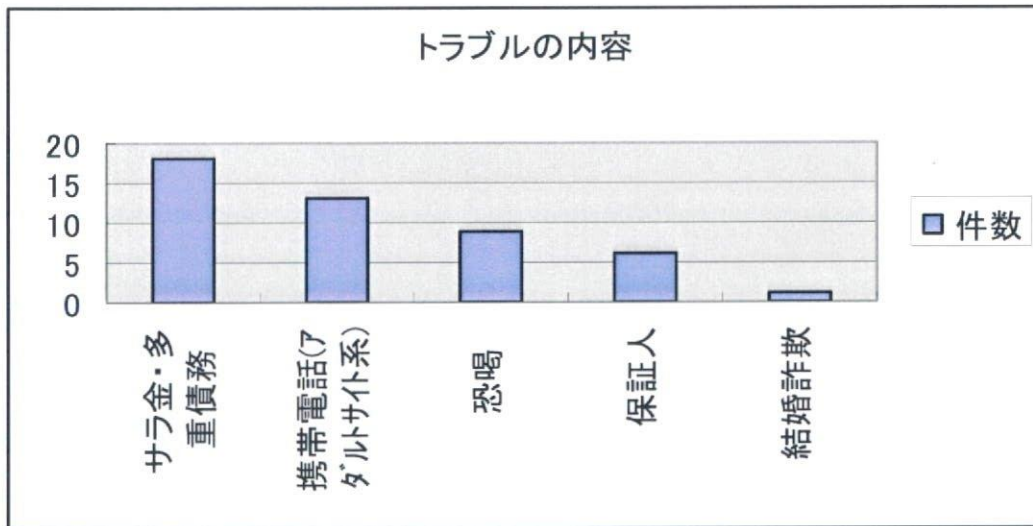
2) 金銭トラブルに関わる（被害事例）について

金銭トラブルに関する事例は62件。47件は被害、10件は加害。どちらともいえないは3件、無回答は2件であった。

1. 事例の内容

金銭トラブルのうち、被害として出された事例は以下の通りであった。

図22のように、サラ金・多重債務被害が一番多く、以下携帯電話、恐喝、他人の保証人などの被害事例が多いことがわかった。



2.2 金銭トラブルの内容

事例の被害時の年齢を見ると、表2のように、被害にあったが一番多いのは、学校卒業から24歳までであることがわかった。

表2 年齢と金銭トラブルの種類 被害(人)

年齢・種類	サラ金・多重債務	携帯電話アダルト系	恐喝	保証人	結婚詐欺
～24歳	11	9	5	3	0
25～29歳	5	1	1	1	1
30～34歳	0	0	0	1	0
35～39歳	0	0	1	0	0
40歳～	1	0	0	0	0
無回答	1	3	2	1	0

図23は金銭トラブル被害の男女比率である。男性が29名、女性が

14名であり、男性の被害が多いことがわかった。

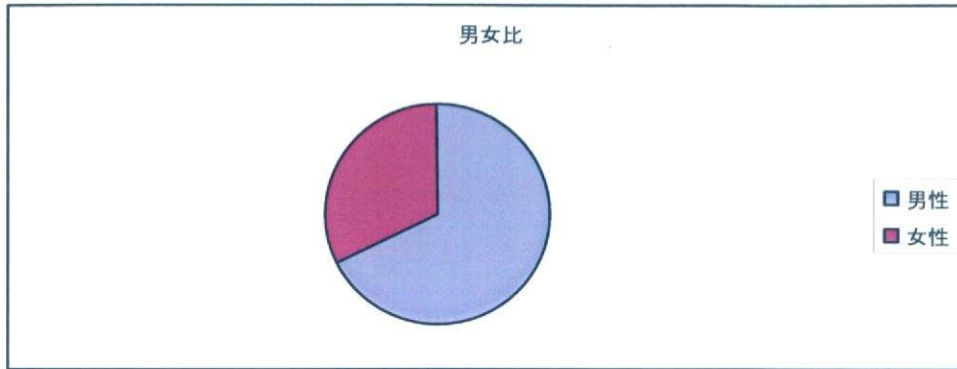


図23 金銭トラブルの男女比

図24は金銭トラブルを複数回経験していた生徒等の割合である（以下、リピーターと称す）。約3分の1が複数回にわたって被害にあっていることがわかった。

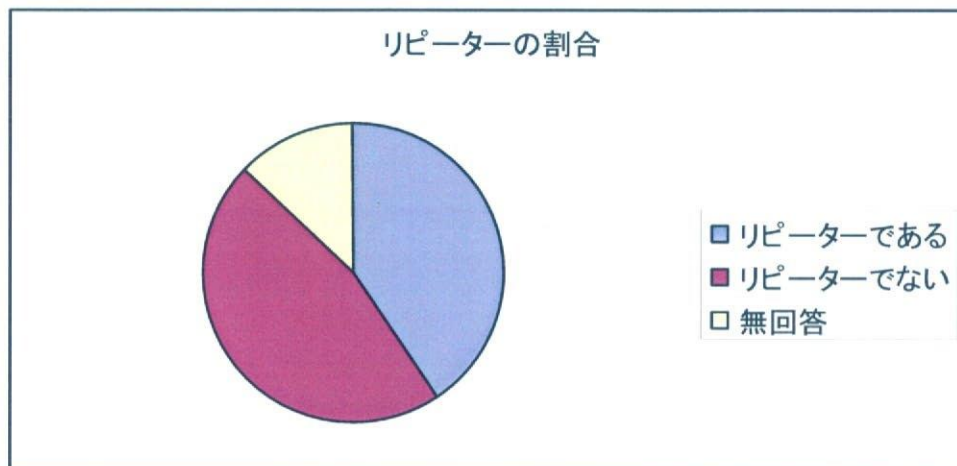


図24 金銭トラブルにおけるリピーターの割合

図25は、金銭トラブルにおいて解決過程に警察が関与した事例の割合である。警察が関与したケースは62件中15件であった。警察が関与したケースの多くは友人からの恐喝事例であった。また、「結婚詐欺被害の対策」について有効だったのは「地域の障害のある青年たちの集いの場」であったことが複数の事例に報告されていた。こうした被害の予防にはやはり本人らの交流活動、本人活動などの充実が望まれていたことがわかった。